

エリアで見る但馬道①



豊富 [豊富地区]

風土記における蔭山の里

豊富地区には県指定史跡の横山古墳があり、また『播磨国風土記』に蔭山の里と記される歴史の古い地域です。甲山は『播磨国風土記』にある冑岡のことと考えられ、山頂にある甲八幡神社は豊富地区を中心とする地域の総鎮守で、品太天皇(応神天皇)を祭っています。

圓通寺の裏手には、『太平記』の逸話として高師直に追われた塩冶高貞の妻が自害し、火を放った小堂があったと伝えられ、文政2年(1819年)に建てられた「蔭山焚堂早田妙応夫人の碑」が残っています。

また、市川の支流である神谷川の堤防に、明治17年(1884年)に建てられた順禮橋(巡礼橋)の碑があります。この橋は、当時廣峯神社から法華山一乗寺(加西市)へ参拝する多くの巡礼者が利用したもので、当時としては珍しい総石造りでした。



甲山



順禮橋(巡礼橋)の碑

船津 [船津地区]

河合寸翁の財政改革の一端を見る

文化年間(1804年~1818年)、姫路藩の財政窮乏は深刻になり、藩主・酒井忠道は河合寸翁(道臣)に藩政改革の一切を委任しました。河合寸翁は木綿の専売制などで藩の財政を立て直しますが、その改革の一環として行われたのが西光寺野台地での朝鮮人参の栽培でした。人参役所が設けられ、藩から薬用人として岡庭小平太・小兵衛親子が派遣されると、栽培は明治初年まで続きました。人参役所は明治4年(1871年)の一揆で焼失しました。その後、西光寺野台地では明治から大正にかけて灌漑工事が行われました。サイフォン式用水路や長池、桜池などのため池が造られ、西光寺野疏水路関連遺産として経済産業省の近代化産業遺産に認定されています。ため池は農林水産省のため池100選にも選ばれています。



人参役所跡



長池

砥堀 [砥堀地区]

銀の馬車道工事の最難関だった橋

砥堀にある生野橋は、馬車道の竣工に際し、藪田橋から名を改められました。橋のたもとは道路の来歴が記された「馬車道修築の碑」があります。馬車道の起点でも終点でもないこの地に碑が建てられたのは、この場所での架橋が最も難しかったからだといわれています。石碑には当時の日本では未曾有の工事であったことが記されています。

播但線沿いに北上すると、日本を代表する思想家・和辻哲郎の生家跡があります。また、横穴式石室墳としては市内最大級規模の古墳である権現山古墳があります。兵庫県は古墳数が全国1位で、播磨地方にも古墳は多く見られます。



馬車道修築の碑



和辻哲郎の生家跡



権現山古墳

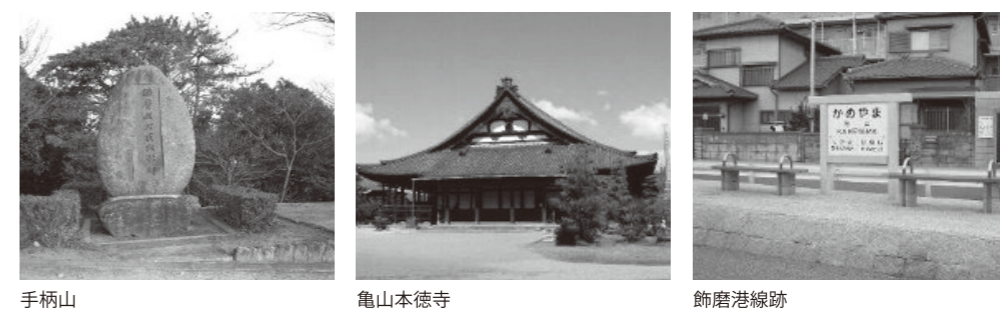
エリアで見る但馬道②



手柄 [手柄地区]

歴史ある寺社仏閣が残る

手柄山は『播磨国風土記』には「手刈丘」として記されている2つの丘からなる山です。東側に船場川が流れ、産業道路と飾磨街道(馬車道)、駅南大路が並行して走っています。現在の区画や道筋には律令時代の条里制の名残があります。周辺には「亀山の御坊さん」と親しまれる亀山本徳寺や、神功皇后の三韓遠征の際、麻生山から放たれた事始めの三本の矢のうちの一つが落ちたといわれる生矢神社などがあります。姫路藩主・本多政武(忠国)が姫路城の裏鬼門を守るため創建した青山神社は、『播磨国風土記』の胄丘にあたるともいわれています。鞆田神社前がある夜啼地蔵は、応仁のころ、父を殺され母を連れ去られた乳飲み子が、母の尊んでいた地蔵に助けられて乳を飲んだといういわれがあり、乳の出ない女性の参拝者が多かったといっています。生野—姫路間を結んだ播但鉄道の一部で、昭和61年(1986年)に廃線となった姫路—飾磨間を結ぶ飾磨港線の跡も残っています。



手柄山 亀山本徳寺 飾磨港線跡

水上 [水上地区]

高瀬舟の行き交うエリア

姫路城の北、市川の流れて沿って開けた水上。かつて市川は幾筋にも川が流れ、今の船場川が本流でした。江戸時代初期、度重なる洪水の末、現在の市川筋が本流に切り替わったといわれています。船場川は姫路城の中堀や外堀に利用され、その後市川からの取水口として樋門が設けられました。決壊、修理を繰り返し、現在はレンガ造りの立派な樋門が残っています。また、藩主・本多忠政は船場川を飾磨津までの物資運搬用に整備しました。保城や西中島に船着き場が設けられ高瀬舟が行き来したと伝えられています。文化5年(1808年)、姫路藩の財政改革に乗り出した河合寸翁(道臣)は、木綿をはじめ皮革、塩、竜山石などの専売制に力をいれました。天保元年(1830年)にはロウソクを専売しようと市川沿いにはげの木を植えたといわれ、その名残の木が現在も残っています。



船場川大樋 船場川高瀬舟 河合寸翁名残のはげの木

飾磨 [飾磨橋東地区・飾磨橋西地区]

銀の馬車道の終着点

『播磨国風土記』によると、大三間津日子命がこの地に屋形を作っていたとき、大きな牡鹿が鳴いたので「鹿が鳴くかも」といわれたことにちなんで、飾磨と名付けたと伝えられます。大化2年(646年)に国郡制が敷かれると、この地名をとって飾磨郡と名付けられ、当時は姫路市街地を広く飾磨といったようです。飾磨津は古くから自然の港として知られます。近世においては姫路城下の外港として、姫路藩の水軍、御船手組が置かれていました。また、明治時代になると生野鉾山寮馬車道の終着点となりました。飾磨津物揚場跡に赤レンガ造りの倉庫が残っています。また、付近には、鉾石の精錬過程で出た残滓を固めたカラミ石を利用して築かれた石積護岸を見ることができます。



飾磨津物揚場跡 飾磨のカラミ石 姫路藩浦手番所跡：飾磨津川口御番所とも呼ばれた姫路藩の番所。飾磨区須加の民家が番所に併設された長屋の遺構と推定されています。